

なかやま探訪 No.93

中山町郷土研究会報 令和 7 年 3 月号

中山町誕生 70 周年記念特集号



木造毘沙門天立像



木造千手観音菩薩立像



木造不動明王立像

岡村観音堂の三尊像（所有者：宗教法人正法寺）

〈特別寄稿〉

中山町の歴史・民俗探訪

「最上川、くらしと祈り」

天童東村山地域史研究協議会

会長 野口 一雄

はじめに

中山町と山辺町、天童市の二町一市はともに東村山郡に属していた。その市町は天童東村山地域史研究協議会を組織し、毎年、研究発表会、会報発行等を行っている。

中山町の由来は、最上氏の下で活躍した武将中山氏に由来する。町の北部には最上川が、東部には須川が流れている。舟運は、米や紅花など内陸の物資を酒田に下し、さらに上方へと送った。須川が最上川に合流する落合地区の熊野神社には、珍しい船絵馬が奉納されている。右岸地区は河岸として栄えた天童市寺津である。

落合からほど近く、最上川沿いの川向地区では、四国こんぴらさんへの樽流し行事が現在も行われている。山形県内でただ一か所残る民俗行事である。

船頭たちが中山町の最上川べりで食べた芋煮が、山形の芋煮の発祥といわれる。

最上川は、京や大坂などから様々

な上方文化や文物をもたらした。

中山町西部の出羽丘陵にあった集落岩谷には、近郷の神寄せ神子・オナカマの信仰が篤かった十八夜観音堂がある。巫業を終えたオナカマたちは、観音堂に巫業時の品々を納めた。これらは後に国の重要民俗文化財になった。また、岩谷はNHK朝の番組「おしん」で、おしんの故郷となっている。

最上三十三観音十四番礼所岡村観音に奉納された「白駒図」（年代不詳）と正徳三年（一七一三）奉納「黒駒図」絵馬には、村民の祈りや願いが表されている。歴史・民俗資料として貴重である。昨年四月、同観音堂本尊木造千手観音菩薩立像及び脇侍木造毘沙門天立像、脇侍木造不動明王立像の三尊が県の有形文化財となった。土橋月山神社奉納の「白駒図」絵馬は、岡村観音堂奉納の「白駒図」絵馬と何らかの関係が考えられる。

多くの分野で地元出身者の活動、活躍がみられる。画家では西塔太原、弟子筋の小松雲涯が名を残している。

中山町無形民俗文化財 「中山町川向の金比羅樽流し」

こんぴら樽流しのことを紹介した記事に、梅木壽雄「旧羽黒町」押口のこんぴら信仰」(『庄内民俗』二十三号 昭和四十年)や、大友義助「中山町向長崎金毘羅樽流し」(『置賜民俗』第七十五号 昭和五十九年七月)などがある。

平成十六年(二〇〇四)四月十八日、久方ぶりに中山町川向の樽流しを見学した。祭りは、四月十五日に近い日曜日になっていた。昭和五十九年(一九八四)四月十五日に取材した地元の樽流しを含め、かつて県内に見られたというところを、香川県金刀比羅宮発行『ことひら』に紹介した(「山形県内の金毘羅樽流し」昭和六十年)。この時は四軒の講中だったが、参加は、高橋吉正さん、白田ヤノさんの二軒のみである。前日から、赤飯や煮染めを手配し、当日は六時過ぎからの準備である。樽を注文し、法印さまを手配し、御芳志も差し上げなければならない。



大変なのでやめることも考えてもいる。祭りの最中、地域の人々が側を行き交いながらも、立ち止まって頭を垂れることもなくなった。地区内には六軒の人々が住むだけ、という。長崎の桶屋が亡くなったあとは、山形の桶屋から一個三五〇〇円で五個まとめて作ってもらった。中山町長崎八坂神社の天狗や、男女の神楽も来なくなった、とのことであった。

昭和五十九年の取材時、樽を流した高橋常五郎氏(表紙写真)は、九十歳を過ぎ健在だが参加はできないとのことだった。

今年は金比羅小祠傍の桜と小手毬が満開だった。白田さんは嫁いだからこれまで、祭りの時に桜が満開になったのは初めてだと話をしていった。七時過ぎ、長崎上町の光秀院住職加納寛祐師の法螺貝で祭りは始まった。師は昭和三十年から祭りを執行しており、師の父も行ってきたという。七時三十分過ぎ、白田ヤノさんが以前よりやや大きめの酒を入れた樽をもって最上川縁に降りていった。川縁と川には段差があり、流れが速く、結局樽を放り投げ、川に流した。樽は、数十メートル先に待機している高橋吉正さんが特製の籠網で



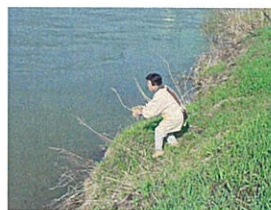
すくい上げた。新たに注文するのも容易でなく毎年同じものを使っているのだそう。現在はロープを結んだ樽を下流で拾い上げている。

由来について白田さんが話した。「金比羅山と刻まれた石が流れてきたので、それを拾い上げて祀った。一時やめたが川に流れて亡くなった人が出たので、また始めるようになった、と聞いている」と。

平成二十五年(二〇一三)「金比羅樽流し」が八年ぶりに復活した。五月六日朝七時、講中の白田ヤノさんらの意向を受けた保存準備会が発足。町内、横尾尚壽さんはじめ多くの人たちに支えられて、長崎の地に再びよみがえった。

香川県では「流し樽」と呼んでいる。俗謡に「沖のかもめかこんぴら樽か今もゆらゆら波の上」と謡われる。山形県で唯一続けられている民俗行事である。山形市飯塚楊柳寺の俳額に、「酒樽も流れて来るや春の海」大正十五年二月初午 紅霞庵主人謹書とある。

※こんぴらの表記は時代によって異なる。



中山町落合の海船を描いた 二枚の「船絵馬」

絵馬は神仏への奉納物であり、絵に奉納者の願いや感謝が表されている。絵馬から歴史や民俗の諸相を読み解くことが大切である。

船絵馬の奉納者は船主や荷主、船頭たちであろう。日本海に臨む庄内地方の寺社には海船の船絵馬が確認される。特に、酒田市高砂船玉神社、遊佐町服部興屋、同町稻荷神社には数多くの船絵馬が奉納されている。金毘羅神に祈る船子と荒波にもてあそばれる絵馬「難船図」が、酒田市大宮白鳥神社に伝わる。

内陸地方には海船の船絵馬はあまり見られない。河岸として栄えた大石田町内、大石田西光寺、同金刀比羅神社、横山熊野神社、同金刀比羅神社などで確認される。中山町落合熊野神社に奉納されている二枚の船絵馬が、最上川の上流に伝わる海船の絵馬の可能性が高い。

写真のような形の船は弁財船^{べんさいせん}と呼ばれる、帆の縦線「幅ごと」に〇〇反と呼んだの反数が二十反を超えると大型船・千石船と呼ばれたようだ。二枚の絵馬とも

二十反前後の千石船である。須川縁にたずむ落合熊野神社は、水神としての信仰が篤かったのだろう。

その1

「明治三十年（一八九七）旧三月十日奉納人 東村山郡最上村大字長崎落合鈴木文五朗」とある。「蓬萊丸」の旗と、帆に山太の屋号と思われる標^{めじるし}が描かれている。文五朗所有の船なのか。描かれているところは酒田の港なのかは不明。三



その1 奉納人 鈴木文五朗

月十日は、こんぴら春の祭りの時である。その2

「秋葉丸」の旗と、「奉納 手遊禁願 并ニ遊女買ヲ断禁 山形縣東村山郡最上村大字長崎千三百〇十三 秋葉沢治三十年明治二十三年寅四月三日」と記されている。船絵馬に、「手遊禁願 并ニ遊女買ヲ断禁」と記したものを県内で他には確認していない。



その2 奉納人 秋葉沢治（中山町立歴史民俗資料館所蔵）

中山町土橋月山神社奉納 什物調査

土橋村は、享和元年（一八〇一）から織田藩領「高畠藩織田領」、天保元年（一八三〇）から天童藩織田領であった。天童関係者奉納物の有無や、令和六年三月に調査した鍛冶職人製作の蠟燭立の再調査などを、令和六年五月三日月山神社祭礼、「土橋獅子踊り」（町無形民俗文化財）奉納見物を兼ねて堂内を調査させていただいた。新たな発見もあった。

「繫白駒図」（元禄六年／一六九三）は江戸時代前期の大絵馬として、『中山町の文化財』（町指定文化財）に紹介されている。岡村観音堂にも「繫白駒図」と「繫黒駒図」が納められている。特に白黒の駒繫図には、願いが叶うまではその馬を逃さない、との強い願いや願いが込められていると考えられる。前年、元禄五年（一六九二）は「庄内凶作 冷氣 西村山郡稻青立 宮城 秋田 津軽半作 七月八日（八月十九日）結露の処あり、青森飢饉」（『山形県災異年表』／二〇一五）の年であった。本年（元禄六年）は晴天が続くことを願い、作付の月（卯月）に白駒を

日乞祈願として奉納したのでろう。

前回未調査であった「鉄製蠟燭立」の銘文を確認できた。「享保十九年（二七三四）寅九月吉日 天童三日町押野氏 山形鍛冶町 粕谷善助作」とあった。

山形市宮町に鍛冶、粕谷打刃物店の建物が残っている。仕事はしていないようだが、店入口ガラス戸に、「創業二八〇年 山十二粕谷藤次郎 手作り打刃物」と記されている。山形鍛冶町 粕谷善助と粕谷藤次郎は親族・一族の可能性があろう。江戸中期の山形鍛冶職人の蠟燭立として貴重である。

華鬘（けまん）（仏堂飾り）型絵馬があつた。

村山地方で確認している華鬘型絵馬は、山形市平清水平泉寺のほか、山形市千手堂吉祥院、山形市鉄砲町勝因寺につづ



く四か所目となる。「雑草の唄」（七十七号）に、山形市やその周辺の華鬘型絵馬を紹介している。

今回調査の絵馬には日天と月天が彫られ、「奉納御寶前 諸願成就 元禄七甲戌（二六九四）」と記されていた。絵のない華鬘型絵馬は初めてである。山形平泉寺の華鬘型絵馬（山形市有形民俗文化財）は元禄期、宝永・正徳期のものであるが、月山神社奉納の華鬘型絵馬は、平泉寺華鬘型絵馬初期のものと同年代である。

月山神社の絵馬は、元禄六年奉納「繫白駒図」の翌年に奉納されており、当時月山神社で大きな行事があったことが考えられる。

月山神社の



岩谷十八夜観音信仰と オナカマ習俗

目の見えない子の手を引いて、岩谷観音堂に詣でる母子姿の絵馬（明治四年奉納）が納められている（現在は、中山町立歴史民俗資料館収蔵）。いつの頃からか、岩谷十八夜観音は眼病に靈驗あらたかな神として信仰されていく。観音堂は、眼が見えない神寄せ神子「オナカマ」の心のよりどころであった。巫業（神子のつとめ）を終えた「オナカマ」は道具類を観音堂に納めた。観音堂内オナカマ関係資料は地元の研究家兎沼宏之氏らの調査研究により、著名な民俗学者宮本常一氏の知るところとなった。

兎沼氏は著書『霊を呼ぶ人々たち』（ちくま少年図書館96社会の本一九八五）に、「宮本常一先生から、こんなおたよりで、はげましてもらったことがある。（略）一つの信仰地へ人びとの寄せた心、そしてそれによって生きぬいた人びとの姿が明らかになることによって、その地の生産力のすばらしさも突きとめることができるのではないかと思っています」との氏のメッセージを紹介している。

昭和五十九年（一九八四）五月、「オナカマ」の道具や絵馬など総数九五一点が、「岩谷十八夜観音庶民信仰資料」として、国の重要有形民俗文化財となった。中山町立歴史民俗資料館には、故人を呼ぶときに使用する「トドサマ」「カミが寄り付くもの」「梓弓」「イラタカノジュズ」、「算木」、易占いに使われる竹ひごのような「筮竹」など、多くの庶民信仰資料が展示されている。

オナカマ関係資料のなかに、二枚の絵馬「獅子舞図」が見られる。享和三年（一八〇三）七月奉納のものに、南蛮帽子をかぶり笛を吹く異人風の人物が描かれている。また、文政元年（一八一八）七月奉納のものに「六軒町」の文字が確認される。高嶺六軒町のことと思われる。中山町土橋の獅子踊りと、天童市高嶺の聖霊菩提獅子踊りとの関係を伝える貴重な資料である。



昭62（1987）.8.18
岩谷観音祭礼



上段：イラタカノジュズ 中段：梓弓 下段：トドサマ

岩谷観音に納められた「馬上女神図」



女神は馬鳴菩薩と考えられる。この菩薩の頭は「オシラサマ」（養蚕の神）として信仰される。オナカマが使用する「トドサマ」に似ており、双方に関係がありそう。筆者の西塔太原は中山町の人で、同郷小松雲涯の師となる人である。

柏倉雪章の師 画家小松雲涯の「請納書」

日本画家小松雲涯は天保三年（一八三二）、中山町小塩に生まれた。本名は和輔。中山町の服部武陵に学び、のち、仙台の菅井梅閑、江戸の春木南溟に学んだ。帰郷後、山形市見崎の鑑水家に入ったが、終生小松姓を名乗り多くの門人を育てた。大正八年（一九一九）、八十八歳で死去した。「山形縣村山四郡書畫諸先生貴名概略 明治廿六歳十月調」には、東の最上位「寒河江柿本鐵堂」に対し、西の最上位に「見崎 小松雲涯」が載っている。

画帳「錦集帖」（折帳本／タテ24cm×ヨコ18cm）は四十丁からなり、三十八丁には二丁一枚ずつ筆者が異なる十九枚の絵が張り付けられている。最初の二丁には、「筆硯精良不如一楽 戊午秋日 嵐月主人題」と書かれている。戊午は大正七年（一九一八）にあたる。

十九枚（二丁一枚）の絵の一枚が小松雲涯（タテ24cm×ヨコ36cm）の筆になる。絵には、あるいは背負われ、あるいは肩を借りて家路に向かう、総勢十九人の中



国風の衣装をまとった人物が描かれている。絵右上には、「家々扶得辞人帰 戊午暮秋 雲涯明八十七翁 「雲涯朱印」とある（写真右）。

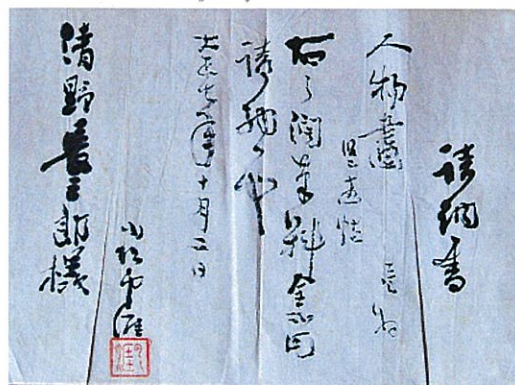
折帳に、小松雲涯一人「請納書」があった。それには、「請納書 人物画 俱三画帖 壹枚 右之潤草料金貳円請納候也 大正七年十月二日 小松雲涯（雲涯朱印） 清野長三郎様」とある（写真下）。絵は、雲涯が没する前年に描いたことが判る。

「潤草料金貳円」とは、現在いくらに

相当するのだろうか。目安に過ぎないが、この年は二円で米が5kgくらい買えたようである。現在米1kgが300円から500円とすれば、一五〇〇円から二五〇〇円の画料となろうか。

『天童美術の流れ』によれば、雲涯の師服部武陵の師は中山町の西塔太原で、さらにその師は天童奈良沢出身の設楽東玉斎（旧姓菱沼）とある。東玉斎は清野長三郎の求めに応じ二度訪れたのであろうか、晩年近く、襖四枚に中国農村風の農業図を、天袋二枚に中国湖南省洞庭湖付近の瀟湘八景風の絵を残している。

高橋由一が明治十七年（一八八四）、山辺町大蔵稻村七郎左衛門家で「稻村なか像」を描いたときの画料領収証を、当家で拝見したことがあった。金額はいくらだったのか、残念ながらその時のメモが見つかからない。



中山氏と最上氏の関わりについて ― 中山町郷土研究会顧問 ―

横尾 尚壽

中山氏は、寒河江大江氏の被官であったが次第に自立した国人になった。

左沢氏、白岩氏、溝延氏なども同族関係から次第に地縁主義化していく。

天正二年（一五七四）、最上氏親子の争いでは中山氏は義守方であった（伊達氏記録）。『長崎村古城主中山玄蕃頭系図』および『楯主の交替』は貴重な史料であるが、諸処に粉飾が見られる。

天正十二年（一五八四）六月、最上義光が大江高基を攻撃した時、中山光直（朝正）は父の朝政の一周忌も済まないのに最上氏に降参したとなっている。この場合、寒河江攻撃の先鋒を命じられるがそれがない。

『山形県史』第一巻は昭和五十七年の発行だが、そこには某年五月十三日、中山光広（光直カ）が最上氏の天童攻撃に關して天童氏縁故の国分氏が助勢するのを牽制した文書である。最上氏の天童攻略は、天正十二年十月だから五月の文書は『楯主の交替』は偽書であることの証

明になる。

もう一件、寒河江市平塩、杉沼家邸内の「日野平三の墓碑」に天正十二年甲申五月十四日がある。平塩の伝承では「山崎楯主の大学頭に、本家の長崎が最上方面になって活躍している、本家に倣うべき」と意見したが大学頭は聞き入れず、日野平三は切腹した。

『中山町史』が『山形県史』などに倣わなかった理由は不明である。

天正時代、出羽国内で最上氏と競った大名は横手盆地の小野寺氏、庄内の大宝寺氏である。大宝寺氏の触手は、左沢氏、白岩氏、山辺氏から寒河江大江氏まで拡がっていた。

山辺氏あて七森氏書状が判明したのは平成十年以降である。そこには「大宝寺義氏が鮭延を平らげたからいずれ寒河江筋に助勢に行く」とあり保角里志氏は天正九年か十年の書状とみている。そして最上義光の山辺攻略がなされ白鳥氏、大江氏、天童氏が天正十二年に最上領となり中山氏は最上氏の重臣となったのである。

『天童合戦の前後』（大木彬著 平成二十四年）には最上方の武將に長崎式部と岡七内があるが、式部は中山

家十代の光信（主膳）らしいが「岡七内」は判らない。

慶長五年、関ヶ原決戦と同じ頃、上杉家家老直江軍が最上領に侵攻したが最上方の戦略のため戦果なく、直江軍は撤収した。戦功によって最上義光は五十七万石の大々名となり、中山光直は華々しく活躍するが元和八年、中山光信の代に、最上家は領内不和を以て改易となる。

二代將軍秀忠侯の温情で、武功の重臣三十人は諸国の大名に召し抱えと成り、中山光信は小田原の阿部備後守に仕える。阿部家は後、岩槻、宮津、宇都宮、福山と移封、天保頃は筆頭老中として活躍している。



日野平三の供養碑

天正十二年甲申五月十四日
(種子) 為日野之平三
種子「キリク」(阿弥陀如来)



講演会の様子

「歴史・民俗探訪」講演会 町の歴史を語る



5月22日、中山町郷土研究会（安彦政信会長）主催の「中山町の歴史・民俗探訪」講演会が開催されました。この講演会は「中山町誕生70周年記念町民参加事業補助金」を活用して行われたもので、天童東村山地域史研究協議会の野口一雄氏を講師に迎え、彫刻や絵画などの文化財から見た「歴史と伝承」、地震や金比羅樽流しなどの「なりわいとくらし」、岡観音、月山神社の什物や岩

谷十八夜観音のオナカマ習俗などの「伝えられる民間信仰」、達磨寺田植え踊りや土橋獅子踊りなどの「伝えられる民俗芸能と文芸」の4つについて、解説を交えながらご説明いただきました。

約40名の参加者は、野口氏の説明に熱心に耳を傾け、町の歴史や文化に対して理解を深めている様子でした。

歴史民俗資料館特別展示—中山家伝来品—開催 振り返る70年の歴史

町誕生70周年を記念し、町立歴史民俗資料館で特別展が開催されています。中山町は昭和29年10月1日、長崎町と豊田村が合併して誕生しました。合併当時は町を挙げて祝い、祝賀行進や合唱が行われたようです。また、町名の由来となった旧領主中山氏が入部して640年目を迎えました。当時の写真や中山家ゆかりの新収蔵資料を中心に、文書や旗指物などを一堂に集めている今回の展示は非常に貴重な機会となっており、来場者は興味深そうに写真を撮ったり見学していました。10月19日には横尾尚壽氏（中山町郷土研究会顧問、古文書を楽しむ会代表）によるギャラリートークが開催され、町の歴史について詳しくお話いただきました。横尾氏の笑みがこぼれるような解説や質問コーナーなどで、より深く学ぶことができました。

特別展は12月26日（木）まで開催していますので、ぜひ覗いてみてはいかがでしょうか。



横尾氏によるギャラリートークの様子



町指定文化財の文書や兜などが展示されています

なかやま探訪 第93号 「中山町誕生70周年記念特集号」

編集発行 中山町郷土研究会

〒990-0401

山形県東村山郡中山町大字長崎221-14 安彦政信方

電話 090-7666-2921

E-mail abiko.ma1950@outlook.com

令和7年3月31日発行

中山町郷土研究会への入会案内

中山町郷土研究会では、随時新入会員を募集しています。

当会では、中山町の歴史、自然の研究を通して、郷土の振興を図ることを目的に、1975年設立され、総会、講習会、調査研究、会報の発行、その他の事業を行っています。年会費は2,000円です。皆様のご入会をお待ちしております。

お気軽に事務局（会長宅）までご連絡ください。